闇に向う精神

真継伸彦

に向う精神

継伸彦

構想社

闇に向う精神

一九七七年六月一六日　第一刷発行

定価一二〇〇円

著　者　真継伸彦

発行者　坂本一亀

発行所　株式会社　構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六
〒101　電話（〇三）二五四一六六〇〇
振替口座（東京）一一五九七一

印刷所　新陽印刷

製本所　小泉製本

© N. Matsugi 1977

0095-00009-2463

闇に向う精神・目次

I

漱石と鷗外——転形期のモラリスト・文学者　8

椎名麟三

懺悔としての文学　65

『菱の花』の冠　80

武田泰淳

自己発見としての小説　84

行為への偉大なる序曲　98

快楽と快楽の間で　100

堀田善衛——日本的心性との対峙　103

鶴見俊輔——非暴力運動の原点　116

高橋和巳

『邪宗門』の問いかけ　133

高橋和巳と現代文学　164

柴田　翔——理性の抒情　178

II

精神の自立ということ　186

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芸術家の自己救済を志す——中村真一郎『四季』 200
美しい言葉の結晶——井上光晴『心優しき叛逆者たち』 204
贋のアイデンティティ——大江健三郎『みずから我が涙をぬぐいたまう日』 208
終末観と自己回復——大江健三郎『洪水はわが魂に及び』 212
終末論の確信——大江健三郎『同時代としての戦後』 216
差別と文学——川元祥一『闇にひろがる翼』 220
おのれの首を刎ねる気配——佐々木基一『おまえを殺すのはおまえだ』 228

Ⅲ

小説の時間 232
『わが薄明の時』 237
『鮫』と『無明』のふるさと 242
『光る聲』の背景 246
二人の死者 256
『林檎の下の顔』 260
小説家が生まれない京都——あとがきに代えて 265

闇に向う精神

I

漱石と鷗外

——転形期のモラリスト・文学者

問いかけと負託

夏目漱石（大正五年没、五十歳）と森鷗外（大正十一年没、六十一歳）と。私は二人の作品をひさしぶりにまとめて読みかえしたのだが、それはおどろくほど新鮮で、また感動的な——、深い共感を強いられる経験だった。ことに、漱石の作品がそうだった。

私はこれから、その新鮮な感動の原因を、能うかぎり明らかにしてみたい。つまり、ごく主観的な読書経験を書きたい。漱石に関していえば、私自身の仏教観を、漱石のそれと重ねあわせてみたい。漱石の生家の宗旨は浄土真宗であるが、彼自身は真宗を嫌い、禅宗にたいして終生、深い敬意と憧憬を寄せていた。漱石は、彼を周期的におそう鬱状態の第一波に見舞われた二十代の終りのころ、苦悩に耐えかねて円覚寺帰源院の門を叩いた。短期間の参禅によって、自己本来の面目（真我）など見きわめられるはずもなかったが、禅宗への傾倒は以後、生涯を通じてかわらない。漱石が真に禅宗に傾倒していたなら、どうしてさらに徹底的に参禅しなかったのか？『草枕』や『門』や『行人』など、禅宗への敬意と憧憬のあふれでている作品を読んで、こういう疑問をいだく人は多いはずである。漱石は自分があこがれていた禅の世界から拒否され、あるいは、自分のほうから入門を拒否して、門前に立ちつくしていたのである。言うなれば、敬意と憧憬以上にでなかった。漱石はいわば仏像をきざ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

む仏師であり、彼自身が仏になろうとしなかった。それは何故であったのか、憧憬する真我の世界から拒否されつつ拒否している、それはどういう心境であったのか、それらのことを、私は能うかぎり明らかにしてみたい。

鷗外に関していえば、私はこの積極的な体制維持者の、内面の空洞と悲惨をみつめたい。禅宗、すなわち出家の世界にあこがれつつ社会人として生きつづけた漱石は、在家仏教徒であった。漱石の心境は、彼自身が嫌っていた浄土真宗の、生臭坊主たちのそれといちじるしく似ているのである。自分があこがれている世界から拒否されているという絶望の心境は、まさしく親鸞のものだったのだから。禅僧たちが自力の修行によって到達する真我の世界が、親鸞においてはとうてい到達できず、せめて死後に到達できるよう、阿弥陀如来に祈っていた世界であった。祈ることができた親鸞は、真我の世界の実在と、彼岸といわれるその世界への到達による救済――、苦悩の解消を信じていた。到達しえないからこそ信じるのだが、おなじ信仰が漱石を支えていた。いっぽう、鷗外は無信仰者である。鷗外は漱石よりはるかに積極的な社会人であり、一種の義人であった。鷗外は漱石のように俗世間を厭いぬき、出家の世界にあこがれたりしなかった。積極的に体制を守り、家族を守り、社会人としての義務をはたそうとした。が、その内部には空洞があった。義務、すなわち義がうながす務めをはたすためには、義の思想が確立されていなければならない。信じられていなければならない。鷗外には、この意味での信仰がなかった。彼はみせかけの義を――、短篇『かのやうに』で明言しているように、義であるかのような義を仮設して、それが結論する務めをはたしたにすぎなかった。鷗外はまったく積極的に務めをはたしたのだが、積極的であっただけますます深刻に、正しい義の不在を自覚せざるをえない。内部に深い空洞が生じる。鷗外が大正元年、五十一歳の年に、交際があった乃木希典夫妻の自決に触発されて『興津弥五右衛門の遺書』を書いていらい、『阿部一族』や『大塩平八郎』や『堺

事件』など、しばらく書きつづける歴史小説の多くの内容は、みせかけの義によって生きかつ死ななければならぬ人間の悲惨である。私はこのような鷗外のニヒリズムの悲哀の内容を、能うかぎり明らかにしてみたい。

ともかく、私は一般の漱石論や鷗外論のように、二人が日本文学史上、また思想史上に占める位置とか、実生活と作品との関係などを、客観的に解明したい気が起らない。私にはそのような、余裕のある読み方ができなかった。二人の模索は五十年以上の歳月を越えて切実な問いかけとなり、重い負託となってせまってくる。私は二人の問いかけと負託に、ともかくも答えなければならない要請を感じている。

このように他人事ではない読書経験というのは、明治・大正期の作家や思想家たち、いや、昭和初期や現代の作家や思想家たちの作品にふれても、まれにしか生じない。私は結果からいえば、たいていの作品を、ただわかるために読んでいる。同時代の思想でありながら、読んでいて、同時代に生きているという気がしないことが多い。ところが漱石や鷗外の言葉を読むと、私自身が語らねばならぬ言葉であるという気がしばしばする。相手の言葉が自分の言葉になってしまうのが共感ということ、あるいは影響ということでもあるのだが、それがどうして生じるのか、私はまずその原因から反省したい。

二人が生きた明治維新後の日本と、第二次世界大戦後の日本とが、既成の文化の崩壊という共通の危機を、持続的に迎えていることは容易に知られる。二人の生まれたころ、日本は二百数十年にわたる長い鎖国が、ようやく破られようとしていた。欧米から殺到し、日本が積極的に受容しようとした文明と文化によって、それまで安定していた日本人の生の様式が破壊され、だれもが地震や洪水に見舞われたかのように、精神の恐慌におちいったはずである。

鎖国がつづいていたなら、江戸の名主の子に生まれた夏目金之助は、名主になるのが最も望ましい運命であった。父が五十歳の年に五人兄弟（他に姉が三人）の末子に生まれ、不要の子として里子にだされたりした金之助が、父にひとしい名主に立身するためにはかなりの好運が必要だったろう。ともあれ、江戸時代にあっては、名主の子は名主になるのが無上の立身であり、それ以上の階級上昇がまず望めなかったことは言うまでもない。

石見国津和野藩の、典医の家の長子に生まれた森林太郎源高湛は、まずまちがいなく典医になっていただろう。そして名主の子にはよき名主に、典医の子にはよき典医になるという生の規範があったのであり、自分をそのような、安定した社会的役割にはめこむ教育手段もまた定まっていた。生の様式が、つまりは文化が安定していたのである。彼らの生き方にはゆるぎない先例があり伝統があり、運命は鋳型のように眼にみえるものであった。漱石の『硝子戸の中』、あるいは鷗外の『澀江抽斎』以下の史伝には、今はうしなわれたその生の様式美が、幻影のように描かれている。

明治維新が、既成の生の様式を突きくずした。二人は自由になり、秩序の抑圧から解放されて活力を――、漱石が「開化は人間活力の発現の経路である」（『現代日本の開化』）と言っている、その活力を発揮できた。名主の子が東大教授になることができ（実際には、漱石はならなかったけれども）、典医の子が陸軍軍医総監になることができる。けれども、未来を予見できぬ転形期に生きる彼らは、同時に不安である。彼らが生まれたころ、東大や陸軍はむろん影も形もなかった。新聞社もしかりである。そして東大や陸軍や新聞社などの設立の過程が、それぞれに不安な暗中模索と、試行錯誤の連続であったことは言うまでもない。欧米諸国のあい異なる先例に学んで、帝国主義国家に変貌してゆく日本国自身が、むろんそうだった。維新の指導者たちに一致した新国家建設の構想などなかったのだし、あったところで、国際関係のたえざる変化や、科学・技術のたえざる発展や新しい受容などが、

予想を始終くつがえすのである。

この、生の様式の喪失がもたらした自由と不安の内容について、ひとつの例を想像してみよう。長州か薩摩のどこかに、若い足軽の夫婦がいたとしよう。御一新に生まれあわせていなければ、二人はよかれあしかれ安定した足軽の生の様式を、終生いとなんだはずである。が、千載一遇の好機に遭遇して、亭主のほうは「幕府を倒した薩長の田舎侍の野蛮」(『素人と黒人』)な活力を発揮し、智勇と好運にもめぐまれて、しだいに立身してゆくとする。野蛮だが柔軟な活力が、やがて彼を明治政府の高官にし、儀式のときには天皇のそば近くに列席するまでになったとする。彼は若い足軽時代には、天皇の存在を知らなかった。しかし江戸時代に三百ちかい藩と天領に分かれ、それぞれが独立国のように異なる文化を有し、文化交流のとぼしかった日本国を統一するためには、天皇という新しいシャッポ、新しい権威を発明する必要があったことを彼は知っている。彼自身、倒幕時代には、深夜ひそかに民家の屋根を駈けまわり、伊勢神宮の御礼を撒いて、統一した民族意識の昂揚のための情宣活動に奔走したかもしれない。今や老いたる彼は、ハイカラな大礼服の蔭に小便袋をひそませて佇立している。彼は文化とは衣裳のように恥部を秘めかくすものであることをよく知っていて、その精神の秘所には、立身のために用いた奸計のいっさいが秘められ、それほど尊敬もしていない天皇にたいして、うやうやしく敬礼するのである。学習院へ通っている彼の子女は、「……なのよ」とか、「……してちょうだい」とか幼女の言葉を使い、それがしだいに、新しい東京弁になろうとしている。数百の方言の持主があい集うとき、最大公約数となって共通の言語になりうるのは、個性のとぼしい幼児と女の言葉である。今までいかめしい武家言葉を使っていた彼も、自宅でナイフやフォークを使って食事するときは、八の字にはねあがった髭をそなえた口で、「お茶をちょうだい」とか言うようになる。

要するに彼の自由は、新たに形成されてゆく生の様式に、柔軟に身をはめこませることができたの

だ。いっぽう、彼の女房のほうが足軽の生の様式しか知らなかったとすれば、しだいに立身してゆく亭主にひきずりまわされて未知の世界をさまよい、どのような精神の恐慌におちいることだろう？彼女のほうはたとえば、赤ん坊を背負って粗末な着物の裾を尻からげし、井戸端で朋輩とおしゃべりしながら洗濯や炊事をすることしか知らないのだ。そのような生の様式のなかへ生まれ落ち、無意識のうちに固着して安定していた彼女の精神が、固着していたものから無理強いにひき離されてゆくのである。言うなれば、彼女が住んでいた城下町の足軽長屋という、狭小な地方文化と階級文化のなかで形成されていた彼女の狭小な世界像が、そのとき破壊されてしまう。立身する亭主に案内される未知の世界にたいして、ふさわしい世界像が形づくれないとき、世界は暗黒で恐怖にみちみちる。実際、彼女が今やごく対等につきあわなければならないのは、それまで無意識のうちに畏敬し、土下座することによって精神が安定し、顔を仰ぎみることもこわくてできなかった殿様や奥方様である。そして、彼女はまじわるための言葉づかいも礼儀作法も、皆目知らないのだ。テーブルの前の坐りなれぬ椅子に坐れば、並べられるフォークやナイフの使い方がわからない。そして眼の前の皿に載せられてただよってくるのは、禁忌であった肉とその悪臭である。そういった新しい生の条件に適応できぬ彼女の精神は、かならずや発狂してしまうだろう。実際に、まだあまり明らかにされていないことだが、明治維新に成りあがった高官たちの蔭に、そういう不幸な妻は多いのである。ついでに言えば、新しい生の条件に楽々と適応しているかにみえる亭主のほうも、適応過剰、すなわち自己喪失という、別種の狂気の危機を多分に有している。

それはさておき、私は実は、今いった智勇をそなえて柔軟な足軽の夫のほうに、鷗外の精神を連想している。鷗外は実際、心身ともに超人的な活力にめぐまれた自由人だった。のちに新しい美学理論をひっさげて明治の文壇に登場し、坪内逍遙をはじめ論敵を頭ごなしにやっつけて百戦百勝する傲岸

なその独立不羈性は、医科大学時代にはやくも外人の主任教授に反抗して不興を買う。鷗外はおかげで大学にのこれず、同級生だった小池正直に助けられて軍医の道をえらばざるをえなかった。が、その精神の柔軟性が、ドイツ留学時代に異国の文化にたくみに適応して、いかに幸せな青春時代を送ることができたかは、よく知られているとおりである。鷗外は、まじわるドイツの知識人たちに、日本人にたいする侮蔑的な誤解があれば、見事なスピーチや文章で反論して日本男児の気概を示し、賞讃を買うのである。典医の子の彼は、少年時代に切腹の作法を学んだ、廉恥心ある武家の子でもあった。

私はいっぽう、固着して安定していた古い文化の喪失と、新しい生の様式にたいする不適応に、気も狂わんばかりに悩みつづける足軽の妻のほうに、漱石の精神を連想するのである。二十三歳の鷗外はみずから留学を志願し、天皇に拝謁すると、祖国発展の意気に燃えてドイツへ赴いた。三十四歳の漱石は命を固辞しきれず、不承不承イギリスへ赴いた。大学へすら、講義が聴きとれないのでほとんど行かなかった。パーティに招待されてもうまく喋れないので尻ごみし、交際範囲はきわめてかぎられていた。自分が積極的に適応できぬゆえに、異邦人たちの眼が悪意にみちみちたものとなってせまってくる。漱石にはそれから身を守って侘しい部屋にこもり、鬱々と頭をかかえる日々がまったく多かったのである。孤独のなかで周囲にたいする恐怖はつのり、ついには、自分がつねに他人から監視され追跡され迫害されているという、狂的な認識にまでたかぶってゆく。加賀乙彦氏をはじめ精神病理学者たちは、漱石が留学時代に二度目の鬱状態におそわれたのだと説明しているが、狂気は帰国後も持続し次のような事件を生む。帰国直後のこと、

「長女の筆子が火鉢の向う側に坐って居りますと、どうしたのか火鉢の平べったいふちの上に五厘銭が一つのせてありました。別にこれを筆子が持って来たのでもない、又それを弄んでいたのでもありません。ふとそれを見ますと、こいついやな真似をするとか何とかいうかと思うと、いきなりぴしゃ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com